魔導戦姫リリカルなのは　"Another Century's "

姫龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔導戦姫リリカルなのは”Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｃｅｎｔｕｒｙｓ”

【Ｎコード】
Ｎ４６３５Ｒ

【作者名】
姫龍

【あらすじ】
・魔導戦姫リリカルなのは”ｆｏｒ　ａｎｓｗｅｒ”本編とは全く関係ないけれどつい勢いで創作してしまった小説を投稿する場所。基本的に続編は有り得ません。

クリスマスキャロルの頃にはｉｎ２０１０年１２月２４日（前書き）

もしも守護騎士がいなかったらという設定。
もともとは２０１０年のクリスマスに創った話しを編集したモノです。

クリスマスキャロルの頃にはｉｎ２０１０年１２月２４日

雪が好きだった。
白いシロイあの結晶がわたしは好きだった。
それは証明(あかし)だから。
わたしに家族が居る事の証明だから。

魔導戦記リリカルなのは～聖夜の送り物～始ります

＊

「なんや、最近寒うなってきたなぁ」
それは１２月のある朝。
目覚めたわたしはうん、と伸びを一つした後、目の前のカーテンを開ける。
「……わおっ」
……思わず、言葉を失った。
わたしの目前にはどこまでも広がる白銀の世界が在った。
それはとても幻想的な風景で――
「……今年はホワイトクリスマスってやつやな」
面倒くさいこっちゃ、と思わず悪態をつく。
普通の人なら、喜ぶんだろう。
綺麗だ、嬉しい、と笑うんだろう。
でも、わたしにとって雪は迷惑以外の何物でもない。
「……今日は疲れる一日になりそうや」
なんだか布団に一日籠っていたい気分だった。

「……まあ、いいか」
けれどやはりどうでもよくなってしまって、結局わたしは布団から這い出て脇に置いてあった車椅子に身体を移す。……雪は面倒だ。でも、それだけだ。
痛い訳じゃない。
そんな事よりも今のわたしは冷える足を被う靴下の方が大事だった。

そうしていつも通り、下のロビーに降りて朝食を作って一人食べて、洗って、学校の課題を始める。

何が、聖夜だ。
結局毎年同じ。
私の家にはわたししかいない。

＊

午後、雪の中をわたしは、図書館まで車椅子を押していた。
傘はさして無い。
どうせ、両手で踏ん張ってこがなきゃいけないから持てないし。
正直、濡れた方が死にやすくて助かる。
「けど……やっぱ寒いのは嫌やな」
まあ、しっかり着込んでるんだけど。
そう一人呟きながら車椅子を押していたわたしは途中、綺麗な亜麻色の髪をしたわたしと同じくらいの年齢の女の子とすれ違った。
ピンクのリボンの印象的な女の子。
彼女はわたしを見て、そして目を逸らす。
よくある反応。
もう慣れた。……あれ？
けれどいつもとは違い、違和感がわたしの胸には残った。

しばし考え、そして理解する。
「……なんやあの子、なんだか悲しい目ぇしてたなぁ」
あれは、同情でも憐れみでも無い悲しみの瞳。
あの瞳を何所かで見た事があったような気がした。
誰だったかは薄々勘付いていたけど、わたしは気付かないふりをした。
「まあ、ええか。さ、はよ図書館行こう」
思い直して、車椅子をこぐ。
……先程の子の名前は、高町なのは。
一年生の時、少しだけ通った学校でよく話していたわたしの唯一の友達と呼べた人。
けれど時の流れは残酷で――
「……やっぱり二年もしたら忘れてしまうんよね」
彼女はもう、わたしを覚えてはいない様だった。

＊

唐突だが、わたしは本が好きだ。
どれくらい好きか、と聞かれれば雪の中車椅子押して来るくらい！　と子供の様に挙手して答える位、わたしは本が好きだ。
最近は同年代の読むような本は全て制覇してしまった為、わたしは高学年向けの本を片っ端から借りて読んでいる。……まあ、たまに受付のお姉さんが借りさせてくれない時があるが。（年齢制限って何だ？）
そんなわたしが現在読み進めているのは世界の伝説やら英雄やらが題材となっている本。……ファンタジーは面白いし、好きだ。
こんなつまらない人生でも頭の中で冒険する位なら許されるでし

ょ？

貸出上限目一杯まで本を借りて、受付まで持っていく。
「あら、はやてちゃん。今日もこんなに借りていくの？」
受付のお姉さんがわたしの名前を呼んだ。
そういえばわたしの名前は八神はやてだった。
「ええ、まあ」
暫く呼ばれていないせいですっかり忘れていた。
「そう……今日クリスマスだけど、なにかサンタさんにプレゼント頼んだ？」
「……ええ、まあ」
嘘だ。
プレゼントなんか頼んでない。
頼んでも気やしない。
けれどわたしはＹＥＳと言った。……憐れまれるのは沢山だ。
「そう、じゃあ気を付けて帰ってね」
「はい、ありがとうございます」
けれどそれを諭させず、わたしはニコリと笑顔を浮かべ、車椅子を反転させた。

サンタクロースはいないと知っていた。
だってこないから。
両親のいないわたしの家にサンタクロースは来ない。

＊

帰り道、とあるスーパーできぐるみサンタが飴をくれた。
”メリークリスマス”
……いったい何が”おめでとう”なのか。飴は実際”ありがとう”だと思う。

本当は雑誌買って帰るだけのつもりだったけど……。
あのサンタクロースもどきに免じてケーキを買って帰る事にした。
そういえば思い出したが、サンタクロースの命日って12月6日だ。
「……ホンマ、何が目出度いんやろ」
死んだら祝福されるのか？
死んでも祝福されるのか？
「まあ、どっちにしろわたしには関係ないな」
わたしの場合、家で一人死のうが、次の診察日までは誰も気付かない。
誰も何も思わない。
夏の鳴く蝉と一緒。
死んだらおしまい、さようなら。
来年もまた鳴いてね？

わたしの存在なんて幻想（サンタクロース）と対して変わりない。

別にそれでもいいと思った。
どうせ、誰も悲しまない。
さて、早く家に帰ってご飯の準備しよう。

＊

食事の後、わたしはテレビ番組を見ると決めている。
最初はバラエティー、飽きたら情報番組、そして九時からはドラマか映画。
今日の映画は”クリスマスキャロル”
とある作家が書いた物語を映画化したモノで、過去、現在、未来

を知った男が公正していくという話だ。初出は１７０年程前ながら、ストーリーは恐ろしく現代チックで、最後は思わずわたしも涙を溢しそうになった。
……まあ、泣けなかったのだが。
そうして映画も終わり、時刻は１１時過ぎ。子供が起きているには少し遅い時間だ。
「……そろそろ寝ようかな？」
そう呟いて、車椅子を動かそうとして、そこでわたしは――――
「……あっ」
サンタクロースに釣られて買ってしまった、ケーキの存在を思い出した。
「あちゃー……しもうたわ」
ここ何年もケーキで祝うという事と無縁だったのですっかり忘れていた。
――ケーキは日持ちしない。
「……明日じゃ、ダメやろうか？」
呟いてはみたが、そこでわたしは思い出す。
「……あかん。あのケーキじゃ絶対日持ちせえへんで」
それも理由ではあったが、今日ケーキを買ったのは何故か。
そう、クリスマスだからだ。
その為のケーキを如何でもいい平日に食うのか？
「……あ、ありえへん」
それではまるで間抜けではないか。
「無理や無理」
有り得ない。そんなのわたしの中の関西人が絶対怒る。
そう、たとえ一人でも譲れない矜持がわたしにもある。
「……食べよう」
ここで譲ったら負けだ。……あ、明日運動すればいいさ！
大丈夫。
……そう思ってからは早かった。

素早く車椅子を動かし、コップと皿を準備する。……ちなみにコップの中身は緑茶だ。
ジュースなんて怖くて飲めない。（今はもう１２時前だ）
普段は使用を厳禁されているライターと誕生日用に、と貰っていた未使用の蝋燭もノリで用意した。
ケーキにヅブヅブと八本の蝋燭を刺していく。
「……しかし、わたしホンマ如何にかしてたわ」
五号サイズのケーキを見てわたしはそう呟いた。……一人で三人前食べるつもりだったのだろうか？
七時間前のわたしは……。
「……考えても仕方ないな」
もう過ぎ去った事と割り切り、部屋の電気を消して蝋燭に火を付けた。

ユラユラと揺れる蝋燭の灯がわたしとケーキを薄ボンヤリと映し出す。

それしか無かった。
写せるモノは……。
この家にはこれしか無かった。
「……なんや、慣れたつもりなんやけど、やっぱ寂しいな」
三年前、小学校に上がる前はこの灯に追加で二つの顔が照らされていた。
お父さんとお母さん。
わたしが小学校にいかなくなったのは、あの人達が死んでしまったから。
それが、理由でもある。
誰かが送り迎えしてくれないとわたしは小学校に行けない身体だったから。
最初はナントカ法人が送ってくれて学校にも行けたし、養子とし

て引き取ってくれそうな人を探してくれても居た。けれどいつからか……養子の話は無くなり、迎えの車も来なくなり、月幾らかのお金を手渡されるだけになった。
つまり無理だったのだ。
後ろ盾も無い、非力でひ弱な子供など誰も欲しいと言ってはくれなかったのだ。
世界は、わたしをいらない、と捨ててしまったのだ。
「……まあ、それは別に構わんのやけどな」
一生一人で生きていくだけのお金は勝手に手に入る。働く必要も無いし、それを嘆く事も無い。
けれどそれは生きてるんじゃなくて飼われているだけだ。
生きていても死んでいても別に如何でもいいけど殺すのは可哀想だ。

きっとそういう事。
どこかの誰かの薄っぺらい正義でわたしは生かされている。
今までも、これからも、この先も、ずっとこのまま。
朝起きて、勉強して、図書館へ行って、スーパーに寄って、たまに病院で診察してもらう。
それを死ぬまで繰り返す。
「……情けないなぁ」
これでは先の映画の男の様だ。……いや、わたしの場合はもっとタチが悪い。
無価値なのだから。
無意味では無く、無価値。
如何でもいい人間。
「……誰でもええから一緒に祝ってくれんかな」
そう思うと無性に悲しくて、わたしは呟いていた。
誰かとこのクリスマスを祝いたい。

知らない人は困るけど、ほら図書館のお姉さんとか、スーパーに居たサンタクロースとか、すれ違ったあの子とか、ああ、病院の石田先生とかでもいい。
「誰かおらへんか……」
誰でもよかった。
誰かわたしに気付いて欲しかった。
別に家まで来いなんて言わない。けれどせめて、わたしはここに居る事に誰か気付いて――
「ホンマ、嫌やわ……」
お父さんやお母さんの様にわたしと今日という日を祝って欲しかった。

でも、それは叶わない我がまま。

結局、いないサンタクロースはわたしの願いを叶えはしない。
今年もそうやって終るんだ。
来年もずっとそう、そういう風にクリスマスは過ぎていく……。

その筈だった。

「……まさか、蒐集完了前に私が顕現するなんて」

――――その驚きを如実に表した女性の声は、わたしの真後ろから聞こえた。……ありえない、家にはわたししか居ない筈だ。なのになんで後ろから声が聞こえるのか……。
振り向けなかった。
感じた感情は恐怖。

いや、確かに誰かと祝いたいとは思ったけど……。
（幽霊の類は御免や！）
そんなモノ、わたしはけして望んだ訳じゃ無い。
「……もしかして、そちらに座られているのは主ですか？」
だというのに……。女性はわたしに気が付いたのか、こちらに歩み寄って来た。コツコツという靴の音が静かな暗い家に響く。
「主、何故こんな早期に私が顕現を？　……それに、ヴォルケンリッターは？　……気配がありませんが？」
（な、なに言うとるんや？　この人……）
状況は最悪だった。
意味の分からない事を呟く不法侵入者。それに背後をとられたわたし。車椅子じゃ万が一にも逃げられないし……それにそろそろ蝋燭の溶け具合もヤバい。
（ケ、ケーキが！！）
蝋燭と混ざり合ってしまう！！
「あ、あの！！」
そんな焦りから気付けば声を上げていた。
「はい、何でしょう主」
それに存外まともな反応を返す女性の声の不法侵入者。……これは交渉の余地があるかもしれない。けれどここ数年、まともに人と話した事の無かったわたしは一体、何を話せばいいのか分からなかった。
でも、何かを喋らなければ……。
（何か、ナニカ、なにか……そうや！！）
思えば、この時既に少しイカレテしまったのかもしれない。
「あの……取り合えずケーキでも食べませんか？　一応、紅茶もありますよ」
（……しまったぁぁぁぁぁぁッ！！）

言って、数秒自身の言葉を全力で後悔する。焦ったとはいえ、まさかお茶に誘ってしまった！！

「……えっ？　あ、あの……主？　……分かりました頂きます」

（しかも了解！？）

そして不法侵入者さんも戸惑いながらＯＫした！！

「……じゃあ、電気つけるんで向かいの席に座ってください」

……人生史上最高の後悔を迎えてしまったが、こうなってはもう行く所までいくしかない。

わたしは解けきる寸前の蝋燭を吹き消し、電気をつけた。

「では……失礼します」

「……はっ？」

そして座った女性（よかった女性だった）を見て、今度こそ驚きで口が塞がらなくなる。

「……どうかしましたか？」

……女性は、銀髪で緋眼だった。明らかに日本人では無い。日本語喋ってるけど。

しかしそれよりも驚くべきは女性の服装。……白のトリミングのある服とナイトキャップ。

色は……緋。

そう、一言で例えるなら文字通りサンタクロース。

美人なサンタさんがわたしの目の前に座っていた。

「もう、なにがなんだか……」

「えっ？　あっ……主！？」

わたしが覚えているのはそこまで。

最後に見たのは最高美人のサンタクロースが焦った顔でわたしを覗き込んでいた事……。

ただ、それだけ。

＊

そうして少女の物語は始まった。
正史は歪み味方は一人のサンタクロース。
けれど彼女はそれを不幸とは思わない。
刻一刻と自身の命が無くなるのを知ってもなお、彼女は笑うだろう。
やっと……やっと家族が出来た。
それだけ少女は幸せだったのだから。

メリークリスマス。

幸福の風が吹いている。

ＥＮＤ

冒険でしょでしょ？（前書き）

もう完全なる錯乱。やっぱり文科系がスバルの如く徹夜を重ねるのには無理が在った……。

それではどうぞ。

冒険でしょでしょ？

≪ノーマ・レギオ≫

まったく世の中はいつ何時何があるか理解出来たモノじゃない。本当に流れというのは不規則でまた、はた迷惑だ。これが自分の生きている世界だとは納得している。これが仕事だという事は分かっている。けれどあえて言わせてもらおう。八神はやて、六課に戻ったら覚えてろ、と。

「本日付けで北高2年5組に配属となりましたフェイト・テスタロッサ・ハラオウンです。よろしくお願いします」

「同じく配属となったノーマ・レギオです」

ああ、きっと今現在の私とフェイトは上手く笑えてはいないだろう。この日本の”ガッコウ”と呼ばれる未成年隔離収容施設に所属している者達は皆一同に私達二人に疑惑と困惑が入り混じった視線を向けていた。

これが所謂「現実逃避」という行動である事は理解している。しかし先ずは状況を整理したいと思う。……というよりさせてくれ。いい加減”私”の頭は情報処理限界を迎えそうなんだ。

＊

新暦七五年九月一九日、私が所属する時空管理局古代遺物管理部機動六課は広域次元犯罪者”ドクター”ジェイル・スカリエッティ率いる戦闘機人集団”ナンバーズ”がロストロギア「聖王のゆりかご」を用いて起した世界規模のテロ（後にＪＳ事件と命名）を見事に鎮圧する事に成功した。

筆頭であるスカリエッティを始め重要参考人である戦闘機人達も

その殆どを捕縛し、これにて一件落着と立て直し&改修工事が完了した六課本部で意気揚々と日々を過ごしていたある日、その報告は舞い込んだのだ。

「――――――」

それは朝食の席での事。早朝訓練を終え、私は六課前線フォワードメンバーと食卓を囲んでいると何やら青い顔をしてはやてがやって来た。いつもはどれだけ罵倒されようが笑顔でヒラリと受け流すついで相手を蹴落としに掛る腹黒狸な彼女のその憔悴仕切った様子は一目で厄介事があったのだと理解出来る程だったが生憎部隊長レベルの厄介事などヒラどころか局員ですらない私に如何にか出来る筈も無い。結果として挨拶するだけに私は行動を留めた。ただ、どうやらその認識は甘かったようだ。空いたテーブルを一人陣どって朝から「ビール持って来いやー！」と叫び出したはやてに流石に見ぬ振りを決め込んでいた他のメンバーもこれは何事だとざわめき出す。

「……ど、どうかしたのかな。はやて？」

「どうしたのはやてちゃん。何かあった？」

結果としてはやての周りには親友である高町なのはにフェイト、そして家族であるシグナム、ヴィータ、シャマルにリインフォース・ツヴァイ。ついでペットであるザフィーラの計六人と一匹が集まった。また何とも大袈裟な事だ。……しかし考えると六課は意外と知人が多い。これで優秀じゃなかったら一体どんな目にあっていたのか。正直ゾッとするな。

「一体何があったのですか、主はやて」

「そうだぜ、言ってみてくれよ。はやて」

しかし家族がここまで心配するとはもしかすれば本当に何か重大な事があったのかもしれない、と思えてくる事も無い。

（……ティアナ。心当たりは？）

（ある訳ないでしょ、私が）

相方であり親友と呼べる人間かもしれないティアナ・ランスター

に一応念話で確認を取ってみたものの返ってきた答えは知らない、つまりはＮＯだった。……我が隊の戦術指揮官にすら知られていない情報。
と、なると私情か余程デカイ事件か……。どっちにしろ厄介事であるのは間違いなさそうだった。
いつのまにか前線フォワードメンバー全員が机を囲む中、はやてがその重い口を開く。

「今日の早朝、地球で巨大次元震が発生。確認から三分。地球が消滅した」

……その言葉を聞いた瞬間、その場に居た全員が文字通り固まったと思う。特に地球出身のなのはは言葉の意味が理解できていないようで、眼を見開きながら口元を引き攣らせていた。
「う、うそ。それって一体どういう――――」

「と、思ったらそのまた丁度三分後。地球が在ったと思われる区域から膨大な魔力反応を確認。きっちり三分後地球が言葉通り「再生」したとのこと」

「――――ねえ、それ本当に如何いう事！？」
状況を理解し思わず泣き叫びそうになっていたなのはは一転、もう訳が分からないとはやてに詰め寄った。……しかし本当に状況が理解不能だ。周囲に眼を奔らせてみたが皆一同に如何いう事だと疑問を浮かべている。
「勿論最初は観測していた管理局員も夢だと思うたらしんよ。それで念の為もう一度映像を見てみたんやけどやっぱり地球が崩壊後六分で再生する映像は残ってた……。
けどほら、それでも信じられるもんやないやん？　だからその局員態々本部に居たクロノくんの所に掛け込んでに映像見せたらしん

や。そんでそのまま事件として本件を譲り受けたクロノくんが直々に嫁のエイミィさんに連絡したんよ。……結果はエイミィさんも子供達も無事。

ただし――――管理局側が認知している地球の標準時間と地球に居る局員が認知している時間には六分の誤差が発生していた。……な、意味不明な話やろ？」

長いはやての話が終わった後、その場には何とも言えない空気が漂っていた。

だが、本当に興味深い話だ。そんな事をした人間が居るとでもいうのだろうか。基本的に魔力資質を持たない地球の民に、それも星を想像するなどという神に等しい所業を？　そんな事が可能なのか。

「ただ、それが原因不明で終わってくれたら良かったんやけどね。先程、連絡が来て原因が解明されたん。……今回の事件は単独犯の犯行。しかも本人は無自覚の事。

それでついては六課に事件解決と対象観察の命令が上より正式に命令された」

そう言ってはやては些か拗ねたように自身の魔道書型デバイスのページを開いた。

そこに表示された立体映像には勝気そうな眼をした一人の少女が写っている。腕にはＳＯＳと書かれたワッペンが付けられているがそれは一体どういう事だろうか？

「地球在住の現役女子高生、名前は涼宮ハルヒ。

この女の子を明日の未明より、六課フォワード全員で監視する事になった。

ついては後程正式な命令書が各デバイスに送信される事になると思うから、各々今日一日かけて準備をするように……。……以上！」

＊

指定された座席に座り教師の話を半分に聴きながら私は昨日の出来事を回想してみたが、如何にも頭が痛いのは何故だろう？　それはきっと今ここに私が居るからだ。

涼宮ハルヒの監視に当たって生徒役として潜入するのはもともとティアナとスバル・ナカジマの役目だった。しかし思い返して欲しい。彼女達二人はもともと軍属で数学の教育を受ける暇があるなら銃器の扱いを復習する方が有意義とされる世界で生きてきた人間なのだ。そんな二人に学があるのか？

その結論に辿り着いた時、司令室のはやては頭を抱えただろう。そこで苦肉の策として送り込まれたのが一応二人よりはマシな私と執務官であるフェイトだという事だ。しかしフェイトは現在十九歳なのだが、とても学生では通用しない気がするのは私だけだろうか？

休み時間、それも昼休みになると予想通り学生たちが集まってきて質問攻めを開始した。フェイトと私は愛想笑いを浮かべながら無難に受け答えす事に集中している。

「へえ、フェイトちゃん今十九なの？　マジ！？　なんでそんなキミがいまさら高校生を？」

……ただ、この谷口という男子生徒はいささかフェイトに近寄り過ぎだ。

なのはに消滅させられるぞ。そうは思ったが口にはしない。それよりお昼とやらはどうすればいいのだろう？　フェイトは”ガクショク”というシステムを知っているらしいが、これでは身動きが取れない。

「……おーい！　えーと、あのハラオウンさん！？」

と、その時教室のドアがガラリと開き、入って来た男子生徒……確か名前は●●●●。同級生からはキョンというあだ名で呼ばれている生徒だ。彼がフェイトを呼んだ。

その理由は直ぐに私の知る所になる。
「あ、エリオ、キャロ。……それにヴィヴィオまで！？　どうしたの三人とも！！」
彼のすぐ脇には所在なさげなエリオとキャロ、それに笑顔のヴィヴィオが立っていたのだ。
「……どういう事ですか」
席を立ち入口の方に掛けるフェイト。その脇を通り自身の席に座ったキョン少年に私は事情の説明を求める。
「あー、レギオさんだっけ。そのなんだ、さっき飲み物を買いに行ったら明らかに日本人じゃないあの三人がウロウロしててこれはアレだな、という結論に落ち着いたという訳だ。
……ところであの三人はハラオウンさんの知り合いかなんかなのか？
弁当持ってきたとか言ってたけど」
「ええ、一応。赤髪の少年がエリオ・モンディアル。桃色髪の少女がキャロ・ル・ルシエ。そしてフェイトと同じ金髪の幼女が高町ヴィヴィオ……」
「なんだ、みんな知り合い……」
キョン少年が視線を向ける先では二つの弁当箱を手渡されたフェイトが三人に手を振って見送っている所だった。――――瞬間、嫌な予感が脳裏を掛ける。自慢ではないが、私の直感はよく当たる。
それも特に悪い方にはなおさら、だ。
「じゃあ、またあとでね！　フェイト”ママ”！　ばいばい～！！」
その幼女が発した一言で間違いなく世界は凍りついたのだと思う。
「うん、また後でね！」
フェイトは今の発言の危うさに気付いていないのだろうか？
「……」
「……」

暫し、無言のまま私とキョン少年は顔を突き合わせていた。……よく見れば彼の顔には薄らと脂汗が滲みだしていた。
「……」
「……あの、もしかして？」
「……ええ、一応”三人ともフェイトの子供”ですが」

――――――――――――――――――――。

『なにいいいいっ！！！？』
聞こえた絶叫は確かにクラス全員分。教室に居た女子生徒全員がフェイトに詰め寄り、男子生徒はキョン少年の近くに座っていた私に殺到してくる。
特別鬼気迫る勢いで走って来た谷口男子生徒は軽く叩きのめして眠ってもらったが、他の男子生徒は純粋な好奇心で迫って来ている為、迂闊に暴力を振るう訳にはいかない。
どうしようもない敵の物量作戦に私は敗北を決意した。
しかしそこに彼女は舞い降りたのだ。

「こら、何してんの。あんた達は！！」

それはまるで王の一介。
教室の入り口付近に立っていた女子生徒の一声でかのモーゼの道の様にクラスメイトは私とフェイトから距離をとった。全員の視線が集まる先に立つのは一人の女子生徒。
「あら、彼方は噂の外国人留学生ね！」
パック詰めの飲料水をストローを媒体に摂取する彼女の名は涼宮ハルヒ。
私達の監視対象だ。
「え、ええ……」
「……というより噂のってなんだ。お前と同じクラスメイトだろう

ハルヒ」
「これは形式美よ、キョン。出会いにはそれなりのパターンというものが必要だと察しなさい！」
そんな理解不能な論理を私の隣に座るキョン少年にぶつけつつ、ずかずかと歩み寄って来た涼宮ハルヒは机をバン、と力強く叩いたあと、ギョロリと私に眼を向けた。……漆黒の瞳、その中に在る夜空に浮かぶ星々のような輝き、そして射通すような力強さを持つ真っ直ぐな目線は成る程、彼女を只者ではないと確かに告げていた。
「私はね、彼方のような人材が来るのをずっと待ってたわ！　放課後面白い所へ案内してあげるからすぐに帰らないでね。勿論ハラオウンさんも！」
ビシリ、とフェイトにも指さし彼女はそう告げた。
願うでは無く告げる。それは既に彼女の中で決定事項の様だ。
（どうします、フェイト？）
（……一応申請してみるけど、たぶんはやては良いって言うと思う）
「うそ、そんな面白い光景が！？　ちょっと、ちょっと、キョン！！　あんた何で私を呼ばないのよ！！」
「無理を言うなよ。俺だって予想外だ」
「かぁー！！　何たる事、ＳＯＳ団団長であるこの私がそんな摩訶不思議な光景を見逃すなんて……にゃぁー！！」
……錯乱したように机に頭を打ちつける涼宮ハルヒの”面白い所”とは一体どんな魔境なのか。
それなりに死線を潜りぬけて来た私ですら思わず帰りたい、と思ってしまう所なのか。
それは分からない。
ただ、私達は彼女を置いて帰る訳にはいかないという事も確かだ。
「……それにしても彼女達って以外と日本語流暢よね。……なんか、

こう予想外？　期待外れって言うのかしら？　学園モノの外国人留学生なんかは大体が胡散臭い日本語を使うと相場は決まっている筈なのに。ねえ、そこら辺はどうなのキョン？」

「……お前は朝の自己紹介を聞いてなかったのか。二人とも純日本育ちだと言ってたろう？」

私とフェイトの潜入任務はまだ始まったばかりである。

ＥＮＤ

冒険でしょでしょ？（後書き）

気が向いたら続きを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4635r/

魔導戦姫リリカルなのは　"Another Century's "

2011年4月24日17時11分発行